

# ウンターリーシングンの福音主義教会とブルーノ・タウト<sup>1)</sup>

蜷 川 順 子

## The Church of Unterriexingen and Bruno Taut

NINAGAWA Junko

The *Evangelic Kerk*, Unterriexingen, in Germany was the site of Bruno Taut's first attempt to employ his idea of color in architecture. He was among the best-known advocates of this type of architecture. Following his graduation from the *Königsberger Baugewerkschule*, he was involved in different projects in various offices before beginning work on the architectural plans under Professor Fischer in Stuttgart in 1904. Subsequently, he entered his work into several competitions. One of these entries, forming a proposal for a children's school, was picked up by Pastor Koch, the editor of a Protestant art and architectural magazine, who was very pleased by the colorful sketches in the proposal.

At this time, there was talk of restoring the village church of Unterriexingen, and on the recommendation of the pastor and Professor Fischer, Taut was given full responsibility of this; this was the first time he had been entrusted with a significant task. Despite the various limitations imposed by traditional practices, he created a glorious rural atmosphere of nature within the village church, making use of intense green, red, and light blue. Until this point, churches had been painted in marble colors, a practice that conformed to the tastes of the upper classes. Taut's use of color, by contrast, expressed the unique values of the peasantry. However, this use of color did not please everyone in the church. Although Taut's work was only understood by a few, his attempt to accentuate the values of the diverse natural world that people live in should be appreciated.

キーワード：ブルーノ・タウト (Bruno Taut)、テオドール・フィッシャー (Theodor Fischer)、教会の現代美術 (Contemporary arts in Church)、色彩建築 (Colored Architecture)、シュトゥットガルト (Stuttgart)

ドイツの建築家ブルーノ・タウト (Bruno Taut, 1880-1938) は、表現主義的色彩建築の提唱者として知られている。その評価をめぐる意見が分かれ、必ずしも認めない人がいる一方で、いまだに——ファンと呼んでもよいような——根強い支持者がいる。わが国では、タウトが桂離宮について、それまでにない形の、詩的で学術的でもあるような著述を残したことから、機能主義に基づく幾何学的形態を基調とした初期モダニズムの建築家だとみなされることがある。しかしながらその著述は、緻密な観察に基づく自然界の色彩対比や陰影効果、および、それらと建築の論理性との関係や、その日記に「泣きたくなるほど美しい」と記した、その美的効果を述べたものである<sup>2)</sup>。実際彼は、フランク・ロイド・ライト (Frank Lloyd Wright, 1867-1959)、ヴァルター・グロピウス (Walter Gropius, 1883-1969)、ミース・ファン・デル・ローエ (Mies van der Rohe, 1886-1969)、ル・コルビュジェ (Le Corbusier, 1887-1965) らが連なる初期モダニズム建築の主流から逸れた、ある意味ではより先鋭的な傍流を形成していた<sup>3)</sup>。モダニズム建築は近代における高層建築を可能にしたが、近代に対して懐疑の眼差しが向けられたポストモダンの時代以降になると、傍流にあった表現主義的形態や色彩が、再び建築的景観に新たな多様性と可能性をもたらそうとしている。

本稿では、そのようなタウト初的色彩建築として知られるウンターリーシンゲンの福音主義教会の改装を扱い、この仕事をした26歳の時点でタウトが到達した色彩建築の可能性を、以下の順であきらかにする。第1章では、ウンターリーシンゲンの福音主義教会改装を引き受けるにいたった経緯を、タウトの経歴、福音主義教会一般の特徴とドイツ近代の特殊事情に言及しながら論じる。第2章では、ウンターリーシンゲン福音主義教会の歴史を掘りおこし、改装前の教会の内部空間の問題と改装に際してタウトに課せられた諸条件を扱う。第3章では、タウトが施した改装の実体をたどる。第4章では、後日談として教会の再改装が行われたことで、評価をめぐる意見が分かれたことに触れながら、タウトが到達した色彩建築の可能性を述べる。

---

1) 本稿は、2023年8月3日に風景表象研究班の主催で開催された国際シンポジウム「ブルーノ・タウトの見た宇宙——ユニバースとメタバースの諸相」の発表原稿に加筆修正を加えたものである。

2) 色彩建築については、蛭川順子「ブルーノ・タウトと色彩」『関西大学東西学術研究所紀要』第55輯 (2022年) : 113-45頁をみよ。色彩建築に関する近年の出版物として、2023年12月18日に開催された風景表象班の研究例会「比較文化史的研究 その4」において講演された北村昌史氏による『ブルーノ・タウト：「色彩建築」の達人』(ミネルヴァ書房、2023年)がある。

3) タウトが形成した表現主義的傍流については、上述のシンポジウム(注1)における報告「タウトと「ガラスの鎖」——表現主義から現代建築へ——」(森創太、東京電機大学)を参照した。

## 1 ウンターリーシンゲンの福音主義教会改装の受注

### (1) 改装受注にいたるまでのタウトの経歴

タウトは1901年3月にケーニヒスベルクの王立建築職学校における煉瓦積職の専門課程<sup>4)</sup>を卒業した後、ハンブルク・アルトナやヴィースバーデンで実務を重ね、1903年にベルリンのブルーノ・メーリング (Bruno Möhring, 1863-1929) の事務所に勤務した。おもにセントルイス万国博覧会 (1904年) に出品するドイツ・パヴィリオンの建設計画に関わる中で、メーリングが得意とするユージェントシュティール風デザインや、鉄やガラスを駆使したモダニズム建築施工技術にも積極的に触れることになる。このベルリン時代には、自身もパステル画を数多く制作したメーリングのすすめもあって、とくに郊外のコリーン湖畔で自然観察に基づく風景画制作を行った。それらの画面には、自然から抽出した色彩の実験的な強調や補色的並置など、印象派以後の分割主義を経て、ほぼ同時代に登場するフォーヴィズムやドイツ表現主義に連なる、研ぎ澄された色彩感覚を散見することができる<sup>5)</sup>。

エフェメラルな万博向け事業が終了した後、次の仕事を求めるなければならなかったタウトは、1904年にはシュトゥットガルトに移ったばかりのテオドール・フィッシャー (Theodor Fischer, 1862-1938) の下で働くことになった。1903年にイエーナ大学設計コンペで、ミュンヘンにいたフィッシャーの案が一等となり、その案を実現するための人材募集にタウトは応じたのである。この職場では、「イエーナ大学の建築の全図面と平面図とディテール」をまとめ、植物を文様化したユージェントシュティール風の天井漆喰装飾案や、評議会室の机や椅子などの家具デザインを行った<sup>6)</sup>。

本稿の主題であるウンターリーシンゲンの福音主義教会 [図1] の改装は、1906年頃にタウトが個人として最初に手掛けた仕事のひとつで、上述のように彼が実施した最初の色彩建築だとみなされている。そもそも教会の改装事業にタウトが関わったのは、この事業計画を相談された次に述べるダヴィッド・コッホ (David Koch, 1869-1920) 牧師やフィッシャー教授の薦めによるものであった。

4) 王立建築職学校については、蛭川順子「ブルーノ・タウトと煉瓦——その意識化の契機——」『関西大学東西学術研究所紀要』第56号 (2023年) : 111-35頁、とくに119-24頁をみよ。

5) ブルーノ・タウトと色彩については、蛭川「ブルーノ・タウトと色彩」113-45頁をみよ。

6) 展覧会図録『ブルーノ・タウト回顧：自然と幻想』マンフレッド・シュパイデル編 (東京：Treville, 1994) 82-87頁。



図1 ウンターリーシンゲンの福音主義教会  
20世紀初頭、ヴェルテムベルク州立イメ  
ージ・アーカイヴ

## (2) 地方の幼児学校建設のための設計案

フィッシャーの事務所にいた間も、タウトは若い建築家の常として、次の仕事を得るための活動をしていた。そのうち、地方の幼児学校 (Kleinkindershule)<sup>7)</sup> 建設に向けたスケッチ 2 枚が、1905年の『教会、学校、住宅のためのキリスト教芸術草紙 (以下『キリスト教芸術草紙』と略)』47号 [図2] に掲載された。牧師でもあった当時の編集長コッホ牧師は、タウトの案を高く評価し、後述するように、別途彼の元に舞いこんだウンターリーシンゲンの教会改装の依頼に対してタウトを推薦した。教会の改装に関して、言わば「よそ者」のフィッシャーやタウトへの委託を地元の教会関係者に納得させたのは、コッホ牧師の推薦があったからである。

ここで、コッホ牧師が掲載した、タウトによる幼児学校のスケッチについて簡単に触れておきたい。そもそもドイツの公的幼児教育における幼児学校というのは、19世紀初頭の経済・社

7) ドイツの公的幼児教育については、Günter Erning, “Geschichte der öffentlichen Kleinkindererziehung von den Anfängen bis zum Kaiserreich,” in *Geschichte des Kindergartens. Entstehung und Entwicklung der öffentlichen Kleinkindererziehung in Deutschland von den Anfängen bis zur Gegenwart* (Bamberg: Otto-Friedrich-Universität Bamberg, 1987) 13.

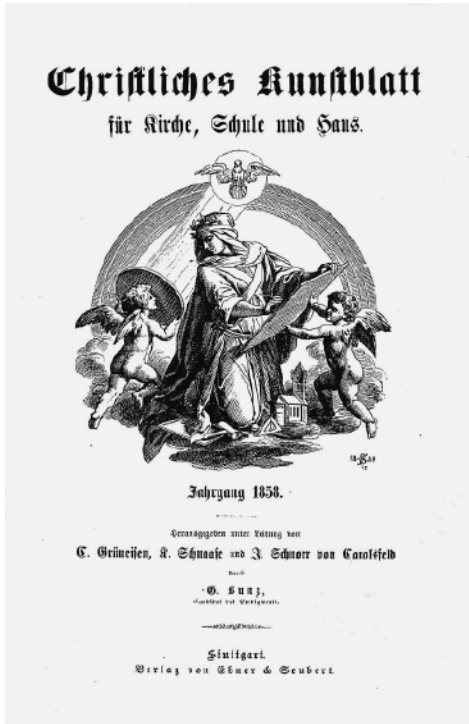


図2 『キリスト教芸術草紙』1 (1858)の表紙 (1903年までは同じ。1904-1907は文字のみの表紙になる)。左の天使がもつ鏡に映しだされた、聖霊の鳩がはなつイメージを、芸術の擬人像が画用紙に描いている。

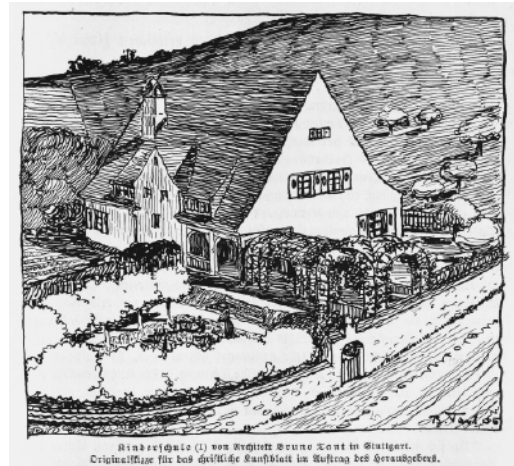


図3 ブルーノ・タウト《幼児学校案I》『キリスト教芸術草紙』47 (1905) 267ページの挿図。キャプションに「シュトゥットガルトの建築家」と記されている。

会情勢の変化により女性の労働力を確保する必要が生じ、家庭外保育が求められたことから、1825年頃から——地域差はあるが——各地に作られるようになったものである。幼稚園 (Kindergarten) と訳されることもあるが、こちらは1840年代に新たに加わった機関で、制度的には区別される。

コッホの記事から読みとれることは、フィッシャーは、幼児学校建築案の提出を求めたコッホからの依頼を、もっとも才能がある弟子だとみなしていたタウトに託したということである。これに応じてタウトは、水彩スケッチを送ったのだが、雑誌では白黒しか掲載できないため、コッホはまずその色彩に言及している [図3]。「屋根は赤、壁は白、窓の錠戸は青、入口アーチは緑で、まるで子供の頃の夢に出てくるおとぎ話の国のようだ」と。当時の校舎一般については「野蛮な (Barbaren-)」と形容していることから、建物の外側をカラフルにする発想は、そ

れまでになく洗練された、「少なくとも職人や農夫の建築に新たな刺激を与えてくれる」ものだと捉えられていたことがわかる。

タウトがこのスケッチに添えた手紙の抜粋も、スケッチと合せて掲載された。その手紙では、「居心地の良さ、家庭的な雰囲気、自然の美しさに対する感覚を、幼い子供たちに呼び覚ますことができる」ような特性が強調され、「夏には、屋根の下でありながら新鮮な空気の中で小さな子供たちが遊べる空間を提供」し、「遊び場とは別に、子供たちが自分たちで花を育てる喜びを通して、自然について学べるような小さな花畑も添えた」と、健康や教育に関する配慮も示している。コッホはこれを「構成、景観、実用性の面で、現代的な要件を満たした」デザインであると、評価のポイントを述べた<sup>8)</sup>。

ちなみに、ウンターリーシンゲンの福音主義教会改装に関して、コッホは1908年11月の『キリスト教芸術草紙』誌上で高く評価している。その受注の経緯を振りかえり、「同僚から、改装の必要がある村の教会の設計案」を求められ、「タウトの三色刷印刷物」を渡し、村の教会を塗り替えることのできる芸術家にタウトを加えたとしている<sup>9)</sup>。実際タウトは、1905年末に、フィッシャーとコッホ牧師の推薦で、この仕事を果たしたのである。

### (3) 福音主義教会の一般的特徴

ウンターリーシンゲンの福音主義教会 (*Evangelische Kirche*) は、ヴェルテムベルクの福音主義領邦教会に所属している<sup>10)</sup>。現代では、1948年に設立された、ルター派教会、改革派教会 (カルヴァン主義)、合同領邦教会 (*Landeskirchen*) の連合体である、統一ドイツ福音主義教会

8) David Kock, "Zwei ländliche Kleinkinderschulen" von Architekt Bruno Taut in Stuttgart," *Christliches Kunstblatt für Kirche, Schule und Haus*, 47 (1905): 265-68. [https://opacplus.bsbmuenchen.de/permalink/49BVB\\_BSB/apna2/alma991034924949707356](https://opacplus.bsbmuenchen.de/permalink/49BVB_BSB/apna2/alma991034924949707356) この雑誌については(5)節 (111頁以降)をみよ。

9) Ulrich Gräf, "Die Innenerneuerung der evangelischen Pfarrkirche in Unterriexingen und ihre denkmalpflegerische Bedeutung," *Denkmalpflege in Baden-Württemberg, Nachrichtenblatt des Landesdenkmalamtes*, 21 (4/1992): 122-23.

10) Evangelische Kirchengemeinde Unterriexingen: <https://www.gemeinde.unterriexingen.elk-wue.de/> 2023年12月10日確認。

展覧会図録『ブルーノ・タウト回顧』88-92頁では「福音教会」となっている。また英語圏で Evangelical Church と呼ばれる教会は「福音派教会」とされる場合が多く、訳語に混乱がある。近年政治的影響力を増したアメリカの保守派プロテスタント教会を福音派とし、リベラル派のメインライン・プロテスタントと区別する方法も試みられている。マーク・R・アマスタツ『エヴァンジェリカルズ: アメリカ外交を動かすキリスト教福音主義』加藤真理子訳 (東京: 太田出版, 2014) 9頁。ここでは、アメリカの保守派プロテスタントを指す言葉としてマスコミ等で用いられている「福音派」から区別するために、「福音主義教会」を用いる。



(EKD: *Evangelische Kirche in Deutschland*) に含まれる<sup>11)</sup>。

ドイツ語の *Evangelische Kirche* には、「福音教会」「福音派教会」「福音主義教会」と、さまざまな訳語が当てられている<sup>12)</sup>。歴史的にみればドイツでは、16世紀の宗教改革以来福音主義という語はおもにルター派に用いられ、カルヴァン派は改革派と呼ばれ、それらが領邦教会<sup>13)</sup>と複雑に絡みあっていた。1817年に、ルター派と改革派の教会合同によって成立したプロイセン福音主義教会において、福音主義という語が合同教会を包括的に示すものとして使われた。こうした、やがてプロテスタント教会全体に及ぶものとなる動きは、1815年の最終的なナポレオン失脚後のプロイセンにおける、文化、芸術の分野でのネオゴシックや中世主義の台頭に伴い、カトリックの代表的な様式であるゴシック様式が重視されたことに対する一種の対抗措置だったと考えられる。1815年にプロイセンの上級建築顧問となったカール・フリードリヒ・シンケル (Karl Friedrich Schinkel, 1781-1841) は、自身はプロテスタントであったが、カトリックのゴシック様式は祖国の理想的な建築様式であることを訴えた。彼が、後にブルーノ・タウトの活動の場のひとつとなるコリーンの旧シトー会 (カトリック) 修道院の保護に取り組んだのも、1817年のことである<sup>14)</sup>。

ローマ・カトリック教会が重視する秘跡や儀式を批判したプロテスタント教会では、地域差はあるが一般に、ミサが行われる祭壇よりも、説教が行われる説教壇に重きが置かれ、聖画像や彫刻が取り外されている場合が多い。ただし、地方の村落部では、新たに教会堂を建てる余裕もなく、カトリック時代の建物を工夫して使い、聖人像などが残されたものも少なくなかった。ウンターリーシンゲンの教会も、そのような村の教会のひとつであった。

#### (4) ドイツ語圏におけるカトリックの禁止と台頭

16世紀の宗教改革期には、ルター派が強かったドイツ北部や改革派の拠点があったスイスでは、カトリック信仰が禁じられたが、19世紀までに徐々にカトリック解禁の傾向がみられた。これに対して福音主義教会では、さまざまな形での対抗的動きがあった。

---

11) H. Schüssler, "Evangelical Church in Germany (EKD)," in *New Catholic Encyclopedia*, vol.5 (Detroit: Gale, in association with the Catholic University of America, c. 2003) 469-70.

12) 石井祥裕「福音主義」『新カトリック大事典』上智学院新カトリック大事典編纂委員会編、第4巻 (東京: 研究社、1996) 311頁。

13) ドイツの領邦教会については、三浦謙「領邦教会」『ルターと宗教改革事典』教文館、1995、269-71頁。

14) 蛭川「ブルーノ・タウトと煉瓦」125-31頁。

## ① ベルリンの場合

ベルリンのあるマルク＝ポンメルン司教管区には、宗教改革までに、カトリックの60の修道院、18の女子修道院があり、それらは早い時期の文化・教育機関として機能していた。また、ベルリンのシュパンダウ門の近くにあった貧困院をはじめとして数多くの貧困院や病院が建てられ、そこでは他宗教の信徒や兄弟団や半聖半俗のベギン会修道女たちも活動していた。

1535年にヨアヒム 2 世 (Joachim II, 1505-71) が選帝侯になった際、翌年に新しい宮廷教会 (司教座教会、後のベルリン大聖堂) が祝別されたが、1539年にヨアヒム 2 世が信仰信条を福音主義へと変えたために、聖堂はカトリックから福音主義教会に属することになった。そして選帝侯は、1540年にマルク＝ブランデンブルク司教管区のためのプロテスタント教会条例を發布し、教皇庁との絆が絶たれ、マルク＝ブランデンブルクの世俗領主を頂点とする国教会が成立することになる。1608年には司教座聖堂参事会も解散し、司教座教会はケルン (旧ベルリンの地名) の上級教区教会になった。

ポンメルン地方 (1945年よりポーランドとして独立する) では、1534年以来宗教改革が導入され、教会や修道院の財産は没収され、カトリックの聖職者に代わってプロテスタントの説教者が配置されて、最終的にカトリックの信仰は禁止された。ベルリン最後のフランシスコ会修道院が1571年に廃止され、カトリックの信仰や教導は長い議論の末禁止されることになった<sup>15)</sup>。

宗教的敵愾心をきっかけにした30年戦争の終結を画す1648年のウェストファーレン条約の締結後、外国公使が居住し始めたベルリンでは、これらの人々の個人的な信仰のためにカトリック信仰が認められるようになったが、ベルリンの住民には禁じられたままであった。しかしながら1667年、選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルム (Friedrich Wilhelm, 1620-88) はカトリックの解禁を遺言にしたため、またその少し後にオーストリア公使館に宗教改革後初のカトリック教会が建てられたことから教区が成立することになった。1711年には、周辺に住む200名を含めて800名からなる教区が生まれていた<sup>16)</sup>。

こうしたカトリック勢力の増加に対抗して、宮廷教会から変遷をとげた上級教区教会が改築された。何度か増築と改築を繰り返したベルリン大聖堂 [図4] は、現在はプロテスタント圏でもっとも規模が大きい聖堂として、第二次大戦期の破壊から復興されている。

15) Wolfgang Gottschalk, *Altberliner Kirchen in Historischen Ansichten* (Würzburg: Weidlich, 1985) 171; Günther Kühne & Elisabeth Stephani, *Evangelische Kirchen in Berlin*, 2nd ed. (Berlin: CZV-Verlag, 1986) 361.

16) Karl-Heinz Klingenburg, *Der Berliner Dom. Bauten, Ideen und Projekte vom 15. Jahrhundert bis zur Gegenwart* (Berlin: Koehler & Amelang, 1992)





図4 ベルリン大聖堂、2016年

## ② チューリヒの場合

1517年のルターの宗教改革に続いて、その2年後の1519年にツヴィングリがスイスにおける宗教改革をはじめた。チューリヒ地域では、1525年から30年にかけてカトリックが禁止された。

1636年頃から、少数のカトリック信徒がチューリヒに居住、滞在するようになったが教会はなく、近隣の修道院にいた隠修士らが彼らの信仰を導くというあり方が、およそ150年近く続いた。この状況は19世紀になると変化し、1798年3月5日にスイスへ侵攻したフランス共和国軍やナポレオン・ボナパルトの介入による体制変動の過程で根本的な信条の自由化が行われた。1789年のバーゼル、1799年のベルン、1803年のゲンフに続いて、チューリヒでも1807年にカトリックへの門戸が開かれた。同年夏にはスイス連邦の州議会がおかれたため、カトリック使節団も受け入れなければならなくなった。カトリック人口は急速に増えて、1850年までには458名から2700名に、1900年までには市の人口の四分の一にあたる42000人（カトリック諸派を含む）となった。

こうした状況下で教会の確保が急務となり、1874年には外国からの資金援助と教区司祭の尽力で、チューリヒ初のローマ・カトリック、聖ペテロ・パウロ教会が祝別された、その後も教区の再編などが進んで、カトリックが定着するようになった。

### ②-1 エールリコン（チューリヒ）の聖心教会

1856年にチューリヒと東スイスや南ドイツを結ぶ鉄道が開通した頃から、チューリヒの中心

部から北へおよそ5キロのところに位置するエールリコンは、産業面で重要な位置を占めるようになり、企業人や労働者ばかりでなく、その家族を含めてカトリック圏からの人口流入が続いたため、カトリック教会の建設が急務となった。教区間の棲み分けがスムーズに行われたエールリコンでは、ただちにイエスの聖心教会建設のための委員会が作られ、ザンクト・ガレン出身の経験豊富な教会建築家オーギュスト・ハルデッガー (August Hardegger, 1858-1927) が設計を担当した。ハルデッガーは首尾一貫して歴史主義様式を採用しており、チューリヒ最初の聖堂である聖ペテロ・パウロがフランス式だったため、ここでは地域性の強いネオゴシック様式が採用された [図5]<sup>17)</sup>。

## ②-2 チューリヒの聖母教会

大都市では聖母教会が求心力となる例が多かったため、チューリヒではまずその建設が検討されたが、カトリックの組織化は必ずしも順調にすすまず、建設が予定された教区が所属に関して問題をかかえていたため建設が遅れた。さらに経費節約のために建築コンペは行われず、ローマのサンタ・サビーナ・アラヴェンティーノ聖堂が聖母教会のモデルとされた。1892年のはじめ、当時上述の聖心教会の設計を担当したハルデッガーに、設計と建築が依頼された。彼は影響力のある美術史家にして隠修士のパーテル・アルベルト・クーン (Pater Albert Kuhn, 1839-1929) とともに、改革派登場以前のカトリックを継承する意味で、塔を二基有する三廊式バシリカを原案としたようだが、コスト面から塔はひとつになり、席数も1000席に減じられた。こうしたある種のマイナス面もあったが、聖母教会はプロテスタント教会との差異を明確にした、スイスにおける歴史主義のカトリック建築を代表する建造物となった<sup>18)</sup>。

1893年5月13日には礎石が置かれ、1894年10月17日に祝別式が行われた。その後、1907年までに個人的な寄進も増えて、クーンの推薦により、隠修士にして画家であったフリッツ・クンツ (Fritz Kunz, 1868-1947) の下で内陣の壁画やアプシスのモザイクが完成した。その後の変更により、教会の内部空間は広がり鮮烈な色彩のハーモニーを生み出している。内陣開口部の大きなアーチは、赤紫のスタッコ大理石で作られたイオニア式の独立した円柱で支えられ、その奥では装飾模様が施されたアプシスのアーチが、向かって左に聖母、右に洗礼者ヨハネがいる玉座のキリストを描いたモザイク画を囲んだ。内陣障壁の一番下にはモザイク画が描かれていて、東側に二人の天使に囲まれた聖母子が、西側に羊飼いととしてのイエス [図6] が描かれており、その胸にはイエスの生命と受難を象徴する聖心が目に見える形で示されている。各

17) *Katholische Kirchen der Stadt Zürich. Bestandesverzeichnis Denkmalpflege der Stadt Zürich*, Herg. Stadt Zürich, Amt für Städtebau (Zürich: Stadt Zürich, Amt für Städtebau, 2014) 57-64 u. 66-72.

18) Op. cit., 72-81.



図5 聖心教会、エールリコン（1934年にチューリヒと合併）。1909年から1944年にかけて、教区会館と塔が加わる。



図6 フリッツ・クンツ《羊飼いととしてのイエス》内陣東障壁（内陣は例外的に北向き）、カトリック聖母教会、チューリヒ

所に見られるように、この聖堂には初期キリスト教時代のイメージを元にしたものが少なくなく、肩に羊を載せた図像は、ローマの彫刻やブリシラのカタコンベに見られるものを原型としていると思われるが——ちなみに、ルターが好んだ図像でもある——、その服装は羊飼いのものではなくむしろ司祭風である。聖心のあるキリスト像としては類例のないものとなっている<sup>19)</sup>。

鮮烈な色彩という点では、ステンドグラスや絵画を多用したカトリック教会では、色彩によって、建築構造がもたらす空間とは別種の象徴的空間が生みだされていた。

#### （5）雑誌『教会、学校、住宅のためのキリスト教芸術草紙』の創刊

ブルーノ・タウトがウンターリーシンゲンの福音主義教会の改装に取り組んでいた頃、ドイ

19) Flurina Pescatore und Marius Winzeler. *Die katholische Pfarrkirche Liebfrauen in Zürich* (Schweizerische Kunstführer, Band 612/13). Hrsg. Gesellschaft für Schweizerische Kunstgeschichte (Bern: GSK, 1997)

ツ語圏のプロテスタント領域では、上述のようにカトリック教会建設がすすみ、福音主義教会であっても、宗教改革直後のカトリック禁止時代にみられたような特徴は薄れ、求心的な構成や壁画などを通じた色彩構成がみられるようになっていた。

政府の方針もカトリック解禁に向かい、1929年6月14日、プロシア自由国と教皇庁の間で交わされた、いわゆるプロシア・コンコルダートにおいて、それまでブレスラウ（下シレジア）[ポーランド語、ヴロツワフ（ドルヌィ・シロンスク）]の司教区に属していた管区がベルリン司教区として独立し、ベルリンの聖ヘドウィク聖堂<sup>20)</sup>に司教座がおかれた。1930年8月には教皇ピウス11世（Pius XI, 1857-1939）によって最初の司教が叙任され、1930年には人口の8パーセントに当たる53万人のカトリック信者を有する大司教区へと発展した。

こうした中で、福音主義神学者カール・グリユナイゼン（Carl Grüneisen, 1802-78）は、1857年に、シュトゥットガルトを州都とするヴュルテムベルク州で福音主義教会におけるキリスト教美術のための同盟を組織し、翌年、弁護士で美術史家のユリウス・シュノール・フォン・カロルスフェルト（Julius Schnorr von Carolsfeld, 1794-1872）とともにキリスト教芸術連盟を設立して、『教会、学校、住宅のためのキリスト教芸術草紙』<sup>21)</sup>の刊行を始めた（図2参照）。同連盟の初代会長を務めたグリユナイゼンは、没するまでその職にあり、この雑誌で、国が組織した教会建設計画に反対して、プロテスタントの教会建設と教会員の芸術理解に影響を与えることを目標に掲げていた。美術に興味はあるが専門家ではないプロテスタントのキリスト教徒にアピールすることを目的としており、「教会、学校、家庭のために」という副題も、このことを表現するためのものである。多少の編集者交代はあったが<sup>22)</sup>、第一次世界大戦中も同じページ数で雑誌は発行され続けた。1919年に財政難から廃刊となり、その後単発的に刊行されたが続かなかった<sup>23)</sup>。

20) 聖ヘドウィク聖堂は、現在ベルリンのカトリック教会の大本山になっているが、第二次世界大戦で破壊され、現在は現代的なデザインの新しい聖堂が建てられている。

21) “Christliches Kunstblatt für Kirche, Schule u. Haus.” すべてではないがデジタル化されている。https://www.ub.uni-heidelberg.de/helios/fachinfo/www/kunst/digilit/artjournals/christliches-kunstblatt.html

22) 名前を挙げるなら、ベルリンの画家カール・ゴットフリート・プファンシュミット（Carl Gottfried Pfannschmidt, 1819-87）、福音主義神学者ハインリヒ・フォン・メルツ（Heinrich von Merz, 1816-93）とその息子が福音主義神学者だったヨハネス・フォン・メルツ（Johannes von Merz, 1857-1929）。エアランゲンの図書館長マルクス・ツッカー（Markus Zucker, 1841-1915）。福音主義神学者ダヴィッド・コッホ（David Koch, 1869-1920）がいた。コッホはウンターバルツハイムの牧師だったが、1910年からシュトゥットガルトの牧師になった。また、ハレ在住の福音主義神学者であり考古学者でもあったオスカル・チュエーリン（Oskar Thulin, 1898-1971）も編集にあたった。Ibidem.

23) 発行部数については、1859年から1861年までの情報が公開されていない。それによると、この期間で

カール・グリユナイゼンによる初刊（1858年）の序文で、グリユナイゼンは、この雑誌の発行基盤となる指針を打ちだした。編集者たちによれば、芸術は「キリスト教に喜んで奉仕する」ものでなければならない。この雑誌は「芸術哲学、古代研究、芸術批評のための講義室」になつてはならず、むしろ「実用的、指導的、啓発的な効果」を持ち、「キリスト教信者の関心と理解」に奉仕するものでなければならなかった。この雑誌の任務は、「建築、彫刻、絵画の重要な古い作品と新しい作品、および複製画の解説」であった。また、芸術を敵視するあまり、「美しい教会の破壊、壮麗な芸術作品の破壊、……近代的な修復の奇形など」をもたらした時代遅れの「清教徒的熱狂」に対抗することも意図されていた。

1905-6年にブルーノ・タウトの設計案を評価したダヴィッド・コッホは、彼が唯一の編集者になった1904年に「われわれの入り口」<sup>24)</sup>と題する指針提示的な序文を書いた[図7]。彼の考えでは、雑誌の主な目的は「生活のための芸術の活用」であるべきだった。また「美術雑誌の再編成」は、建築が「プロテスタントの告解の精神と目的に対応する新しい礼拝所を創造する」任務を担っていることを考慮に入れるべきであった。コッホは、「キリスト教に関心のある一般の人々、そして牧師たち」が発言できるような「討論室」のようなものを雑誌に設け、「芸術家たちの口やペンから直接語られた多くの言葉」が掲載されるようにしたいと考えていた。この雑誌は「芸術の自由」を尊



図7 コッホ「われわれの入り口」『キリスト教芸術草紙』46（1904）1ページ挿図。キリスト教の擬人像と芸術の擬人像が手を取りあっている。

もっとも購読者数が多かったのは1859年から1861年にかけての期間で、「本国」ヴュルテムベルク（約200部）、ザクセン（100部以上）、バイエルン（約100部）、プロイセン（約500部）であった。ヴュルテムベルク州の購読者の大部分は、ヴュルテムベルク福音主義教会キリスト教芸術連盟の会員で、会誌のような役割を果たしていた。Eva-Maria Seng, *Kirchenbau zwischen Politik, Kunst und Liturgie* (Stuttgart: Verein für Kirche und Kunst in der Evang. Landeskirche Wasmuth, 1995)

24) [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Koch,\\_David,\\_Unser\\_Eingang.pdf](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Koch,_David,_Unser_Eingang.pdf)



重するものであったが、「キリスト教芸術の理想は（中略）キリスト教芸術の表象的価値観のドイツ的なものでなければならない」というモットーは、当時の国民精神に呼応するものであった。

## 2 ウンターリーシンゲンの福音主義教会改装まで

### (1) ウンターリーシンゲンの教会の歴史の変遷

ウンターリーシンゲンは、シュトゥットガルトの北約13キロメートルのところにあるルートヴィヒスブルク近郊の小村である。近隣では新石器時代の定住跡が発見されており、ケルト人の居住やローマ帝国による支配の痕跡もあるが、キリスト教化はメロヴィング朝期に、ヴァイセンブルクのベネディクト修道院の修道士たちにより進められた。670年頃から教会の組織化や、シュパイヤー司教区との契約、シトー会へ聖務が引きつがれるなど、他の地域のキリスト教化と平行した展開があり、また巡礼者の中継所としての役割を果たし、救難聖母祭壇もあったことが知られている。

宗教戦争が勃発し、ヴュルテムベルク地方の運命の年となった1534年5月16日に、シュトゥットガルトの司教座教会がはじめて福音主義の説教を行い、近隣の教会も続くことになった。1618年にはカトリック陣営と福音主義同盟の間で30年戦争が勃発した。1622年までは戦闘が続いたが、その後主要な戦場が北ドイツに移ったことから穏やかな日々が続き、教会の改装が検討されることになった。この頃この地域では福音主義が優勢となった。

折しも1627年に、老朽化した教会の塔が強風によって倒壊した。当時のこの地域の首長だったフィリップス・フォン・ニッペンブルク (Philipps von Nippenburg) とヨハンス・フォン・シュテルネンフェルス (Johanns von Sternenfels) は、自然災害による損害だったために改築費を共同体から捻出することにした。シュトゥットガルトの建築家カスパー・クレッツマイヤー (Kaspar Kretzmayer) に「共同体議会に向けて、改築案と見積もり」を出すよう依頼し、倒壊した塔を新たに建てるだけでなく、教会を快適なものにするための拡張も提案された。建築家が実際に現場を訪れて、建物を東西に拡張することとなった。ウンターリーシンゲンや近隣の壁工や石工の手で1628年に着手され、翌29年に改装が完成した。この1628年の改装は現在の教会の構造を規定しているが、ルネサンスやゴシック様式の要素も残存した内部は、あまり調和がとれたものではなかった。タウトが改装を行う1906年までに、細部に修正が施されたり、1882年にシュトゥットガルトのヴァイグルによって製作されたパイプオルガンが二階に設置されたりしたが、全体のまとまりのなさは払拭されなかった<sup>25)</sup>。タウトによる改装は大がかりなも

25) Harald Goldschmidt und Wolfgang Weber, *Evangelische Kirche Unterriexingen* (Unterriexingen: Pfarramt,



ので、最終決定までに教会評議会や信徒会での議論があり、いくつかの条件がだされた<sup>26)</sup>。

## (2) ウンターリーシンゲンの教会のパトロンからの条件

教会に取りつけられたプレート [図8] に、この教会の設立者として名前があがるニッペンブルク家は、15世紀にはヴェルテムベルク公国の重鎮として経済的にも政治的にも絶頂期にあった。しかし継承や相続に関する問題が続いたことで領地が減少し、17世紀にはウンターリーシンゲンを含む周辺の地域に限られた。フィリップは1646年に没するが、ここで男系が絶え、女系親族の孫娘が1685年にロイトウルム・フォン・エルティンゲン伯爵家に嫁いだことから、その後ロイトウルム伯爵家が代々教会の庇護者<sup>パトロン</sup>となった。もうひとつ名前が挙がっているシュテルネンフェルス家は、シュヴァーベン<sup>バトロン</sup>のいくつかの騎士団に属していたが、1828年にヴェル



図8 教会の説明盤、1628/29年設立時の関係者の名前がある。

1996)

26) 議事録などに基づく議論の詳細は、Manfred Speidel, Jörg Albrecht und Sebastian Giesen, "Die Erneuerung der evangelischen Kirche im Jahre 1906," in: Hans-Burkhard Hess, *Unterriexingen. Ein historisches Kaleidoskop* (Herausgegeben von der Stadt Markgröningen, 1993) 72-95.



図9 改装後の伯爵家の棧敷、ガストバール牧師やタウトが座っている。



図10 伯爵家の棧敷胸板の記念プレート、現在は図9にみえる天蓋は取り除かれている。



図11 フランツ・ミュッツェンベッヒャー、デザイン《伯爵家の紋章》

テムベルクが公国から王国になったときに爵位を得た<sup>27)</sup>。

ロイトゥルム伯爵家は、1628年の教会改装時に、庇護者として二階に特別な伯爵家の棧敷席を作らせていた。タウトの改装に際して、後述するように祭壇の位置が身廊の中心から内陣に移ることになったために、ミサの様子が見えにくくなることから、伯爵家は棧敷席を一階の内陣に近いところに設置するよう条件を出している [図9]。

タウトはそれにしたがって伯爵家の棧敷を移動し、その胸面には、1685年の年記がある名誉市民の記念プレートが取り付けられた [図10]。天蓋がある棧敷席上部中央には、タウトの友人の画家フランツ・ミュッツェンベッヒャー (Franz Mutzenbecher, 1880-1968) がデザインしたロイトゥルム伯爵家の紋章があったが、現在は壁にかけられている [図11]<sup>28)</sup>。

27) 神聖ローマ帝国がナポレオンに滅ぼされ、シュトゥットガルトを首都とした新たな王国が産業発展に力を入れたことについては、溝井裕一「シュトゥットガルト——産業都市がもつ「ワイルドな」側面に迫る」『ドイツ王侯コレクションの文化史——禁断の知とモノの世界』森貴史編（東京：勉誠出版、2015）277-305頁。Goldschmidt, *Evangelische Kirche*, 4 ff.

28) Ibidem.

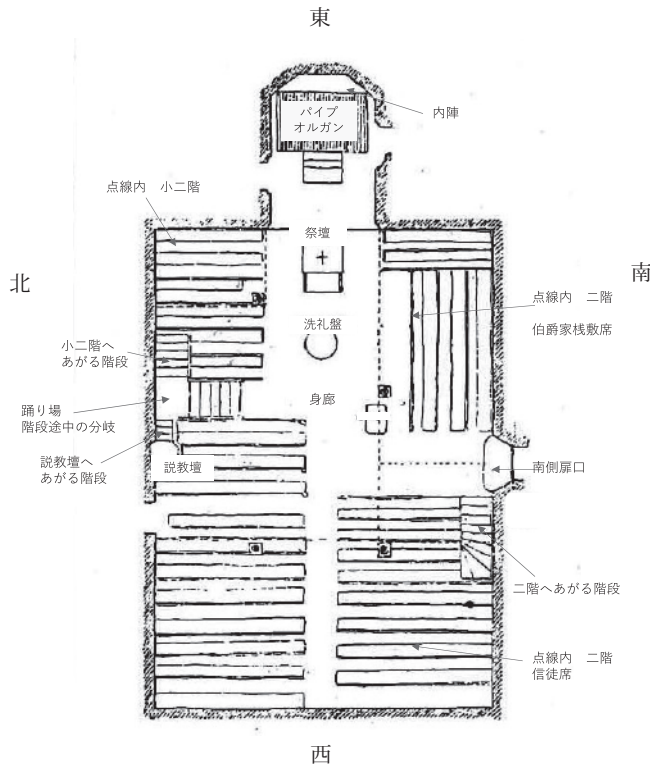


図12 改装前の平面図（平面図原画は図13とともに、『ヴェルテンベルク建築雑誌』1907年、381ページより）

① 教会専従のガストパール牧師の依頼と条件

そもそも教会が改装の必要に迫られたのは、1893年に同教会に赴任したヨハネス・ガストパール (Johannes Gastpar, 1865-1933) 牧師の希望で、1895年にパイプオルガンを内陣に設置し、このときそれまで内陣アーチを南北に貫通していた二階部分が切りとられ、二階の一部 (図12の小二階) が— シュパイデルの言葉を借りると — 「鳥の巣」のように残されたことに端を発する。しかしながら、内陣の湿気と、窓から吹きこむ風によってパイプオルガンが損傷したため、1905年これを向かい合う二階に移す必要に迫られていた [図12]。そのためガストパール神父はコッホ神父に、建築家の紹介を依頼したのである。したがって、パイプオルガンを二階に移すことは不可避の条件であった。

② 上席教会評議員メルツ博士の条件と批判

ガストパール牧師は、明快な空間印象を損なわないように、祭壇を建物の奥、すなわち内陣

に置く案について、教会評議会や信徒会の同意を取りつけていた。「鳥の巣」のように残っていた二階部や祭壇から離れてしまった説教壇を撤去する意見もあったが、上級教会評議員のメルツ博士は、小二階と説教壇の保持は不可欠だとした。むしろ、プロテスタントの典礼形式のために祭壇を身廊に戻すよう薦めた。結果的に祭壇は内陣に置かれたのだが、「北ドイツ人のタウトは、ヴェルテムベルク州の教会の特殊性を理解することなく、改装を実行した。まもなく彼はヴェルテムベルクを去り、おそらく二度と会うことはないだろう」とまで述べている。シュパイデルは、そもそもメルツは、祭壇内陣案に最初は反対せず、また小二階と説教壇の保持という彼の希望は聞き入れられているので、この批判はあたらないとしている<sup>29)</sup>。

### 3 ブルーノ・タウトによる改装

すでに述べたように、フィッシャーやコッホの推薦により、タウトは1906年のはじめにガストパール牧師に改装案を描いたスケッチを送っている<sup>30)</sup>。このスケッチは残されていないが、牧師や市長が何より感心したのは、スケッチに施された彩色だったようだ。牧師は「これは美しくまた感情に満ち溢れたものです。親しみやすく、素朴で、色鮮やかな小さな教会、私どもの農民たちにとっても馴染みやすい場所だと思います。彼らにとってここは故郷のようなものであると同時に、また神の御言葉が伝えられるに足る威厳を持ち合わせた場所となりましょう」<sup>31)</sup>と返事をしている。このような経緯で改装を引き受けたタウトは、大きく二つのことを実現した。ひとつは改装による空間の整理と、色彩空間の創出である。

#### ① ウンターリーシンゲンの教会の内部空間

改装の条件として出されていた祭壇、伯爵家の棧敷、パイプオルガンの配置換え、小二階と説教壇の保持に加えて、1720年の洗礼盤はそのまま残された。説教壇の正面の南壁面には、新たにルネサンス式の扉が設置された<sup>32)</sup>。扉を開けると、説教者の前は外に繋がる空間になるため、ここでは外に向かって説教がされると揶揄されることもあったようだが、建築空間全体でみると、空気や光の流れは明快である。

29) Manfred Speidel, "Die polychrome Farbfassung von 1906 in der evangelischen Pfarrkirche in Markgröningen-Unterriexingen, Kr. Ludwigsburg," *Denkmalpflege in Baden-Württemberg, Nachrichtenblatt des Landeddenkmalamtes*, 21 (4/1992): 118-22.

30) タウトが引き受けた経緯およびガストパール牧師の経歴については、Speidel, "Die Erneuerung," 73-75.

31) 展覧会図録『ブルーノ・タウト回顧』90頁。

32) ルネサンス様式の扉が設置された。Speidel, "Die Erneuerung," 72.

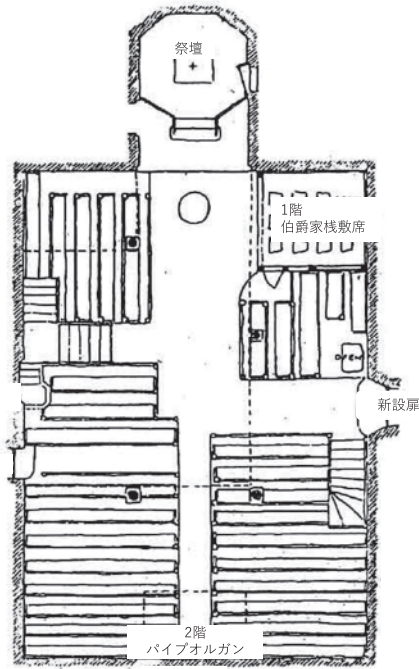


図13 改装後の平面図、図12からの変更部分のみ記した。

内陣に置かれた祭壇については、壁との間に人が通りやすい空間を作るために、基部を八角形として祭壇そのものが作りなおされた。祭壇の裏側にはこの改装実行者として、タウトは署名のイニシャル「BT」と改装年「1906」を彫り残している。北壁の中央部にあった石造りの説教壇も——設置時期は不明だが——そのまま残され<sup>33)</sup>、そこに通じる階段が中程の踊り場で分岐し、一方が小二階に通じているのである。実際、さまざまな条件をクリアしたタウトの改装は、「空間的状况に対する良い解決策」だと評価され、今日まで維持されている<sup>34)</sup>。[図13]

33) 説教壇が北壁の中央にある教会は、ヴェルテムベルク州には他にひとつしかない。この説教壇の位置は、典礼上「あり得ない」ため、ウンターリーシンゲンの牧師は「ドアの外」へ説教しているという冗談が、他地域からの観光客によく聞かれた。„KiBa-Kirche des Monats Februar 2021“ in Unterriexingen Sanierung von Kirchturm und Dachstuhl der Dorfkirche beginnt im Frühjahr, <https://www.stiftung-kiba.de/presse/kiba-kirche-des-monats-februar-2021-in-unterriexingen-4809.php>. 2023年12月10日閲覧。

34) Goldschmidt, *Evangelische Kirche*.





図14 ブルーノ・タウト《ウンターリーシンゲンの教会》1907年、パステル、灰色紙、18×12cm



図15 マックス・タウト《ウンターリーシンゲンの教会》1907年、パステル、灰色紙、13.5×13.5cm

## ② ウンターリーシンゲンの教会の色彩構成

改装が終わった当時の内部の色彩は、現在部分的にしか残されていない。1906年に改装された当時の教会内部の色彩構成は、ブルーノ・タウトの遺品から発見された、07という年記のある小さなパステル画（18×10cm）〔図14〕に見られる。シュパイデルは「瑞々しく、力強いモスグリーン、白、ライトブルー、赤褐色の正確な筆致」と述べ、「祭壇が設置されたゴシック式内陣壁面のライトブルーと網状肋骨穹窿の星がまたたく濃紺とが、壁面基部のポンペイ赤やオレンジと補色的な対比を生み、それがアーチの上の半身像の色彩と響きあう。これらを正しく解釈するならば、タウトは壁の薄水色から濃紺、ポンペイ赤からオレンジの変化を通して、光の変化による色彩効果を計算していることがわかる」と分析している<sup>35)</sup>。

同年、弟のマックス・タウト（Max Taut, 1884-1967）もこの内陣を後方二階席の下からみて描いたパステル画〔図15〕を残しており、長椅子の緑、内陣の青、赤の三色が、間に白を置いて効果的に響きあっている。タウトは1906年の改装の竣工式にあたって「ウンターリーシンゲンの農民教会は強烈な色彩をもって光り輝いている」と述べた。タウトを推薦したガストパー

35) Speidel, "Die polychrome Farbfassung."



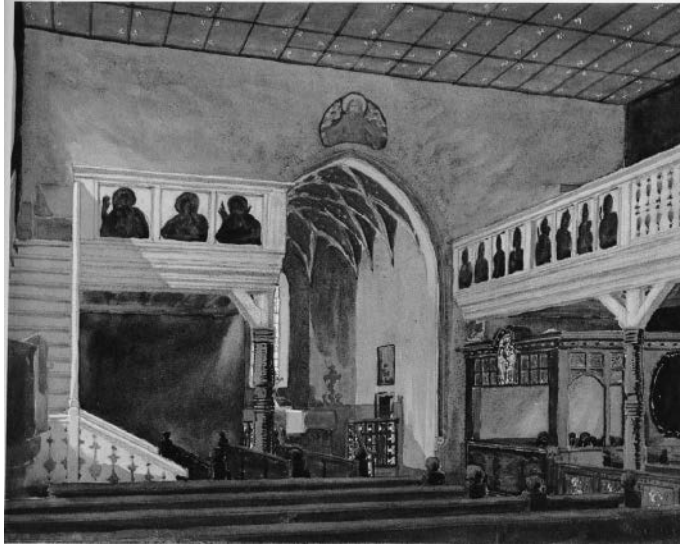


図16 ブルーノ・タウト《ウンターリーシンゲンの教会》1908年、水彩

ル牧師は、1907年の報告書の中で「彩色は多彩を極めニュアンスに富んでいる。従って当然のことながら個々の色彩について意見が分かれるかもしれない。しかし全体的な印象は、極めて真摯で厳粛なものである」と記し、色彩について異論があったことをほのめかしている<sup>36)</sup>。

その後1908年8月にベルリンで記憶に基づいて描かれた水彩画 [図16]<sup>37)</sup> が『建築展望 (Architektonische Rundschau)』7月号に掲載されたが、ここで色刷印刷を担当したデザイナーは、修正を加えてかなり控えめな色彩を使った。建築において色彩を基材から独立させて、色彩同士の強烈な対比と表現力をねらったタウトの試みが、ある意味で骨抜きにされた格好である。これに対してコッホ牧師は、村の教会の改装の手本になるとしてそれを高く評価している。

全体的な賦彩だけでなく、教会にはタウトたちが描いた人物や植物モチーフが残されている。小二階の胸壁に描かれた《救世主キリスト》《二本の鍵をもつペテロ》《アンデレ十字に架けられた聖アンデレ》の他、身廊側の三つの胸壁パネルの花模様も、1906年にタウト自らが描いた

36) 展覧会図録『ブルーノ・タウト回顧』92頁。

37) ここでの色彩は、教会の水色の壁は紫色を帯び、祭壇台座のボンベイ赤が側面をオレンジ色に染めている。シュバイデルによれば、賦彩を施した友人の画家ミュッツェンベツヒャーは、短期間だがシュトゥットガルト・ヘルツェル派とつながりがあった。美術アカデミーの教師としてシュトゥットガルトにやってきたアドルフ・ヘルツェル (Adolf Hölzel, 1853-1934) は、1905年12月にテオドル・フィッシャーの依頼でプフリンゲンの色彩計画を行い、緑、紫、オレンジのコーディネーションについて語っている。このことからヘルツェルの色彩理論の一面を取り入れた可能性は十分にある。Speidel, "Die polychrome Farbfassung," 121.



図17 ブルーノ・タウト、小2階胸板パネル  
《花の咲く植物》部分的に上塗

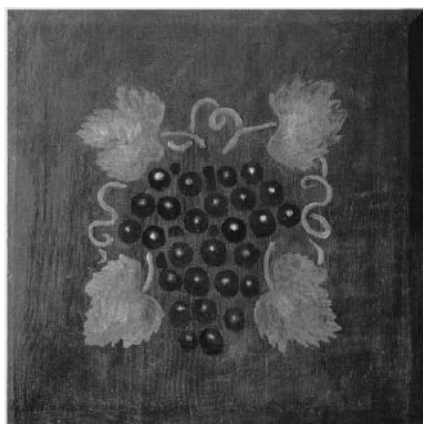


図18 ブルーノ・タウト、デザイン、信徒  
席胸板《葡萄》

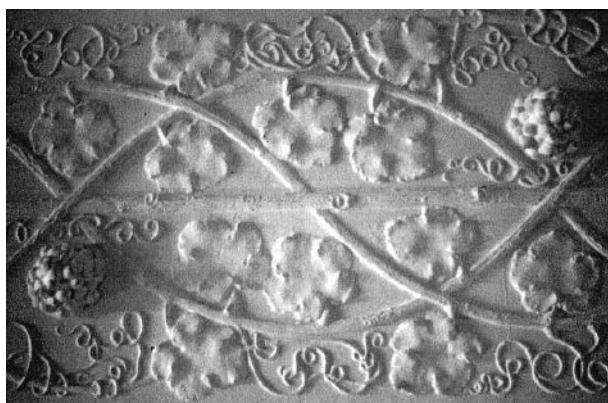


図19 ブルーノ・タウトによる、天井漆喰装飾の《葡萄》デザイン、イエーナ大学東館玄関ホール

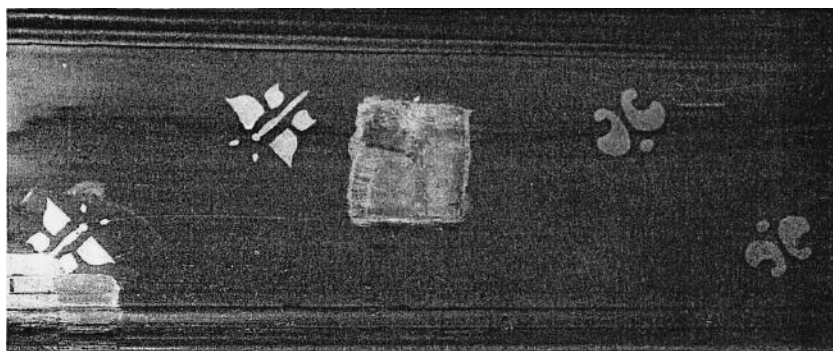


図20 ブルーノ・タウトによる、蝶のステンシルを用いた天井装飾デザイン

ものであるが、部分的に上塗りされている [図17]。南側二階の胸壁には古い預言者像や《本とペンをもつパウロ》《毒杯をもつ聖ヨハネ》《槍をもつトマス》《大ヤコブ》《小ヤコブ》《マッテウス》《シモン》《マティアス》が描かれている。福音主義では聖人崇敬は抑えられ、写実的な立体感は乏しいが、素朴な力強さにあふれた人物像になっている<sup>38)</sup>。

また信徒席ベンチの部分装飾として、花の咲く植物を様式化し、素朴なタッチで葡萄を描いた [図18]。当時携わっていたアールヌーヴォー風の優美な曲線を駆使したイエーナ大学の装飾 [図19] と比較すると、村の教会にその優美さはないが、左右非対称のリズムの中に生命感のある動勢が認められる。緑のベンチのブドウと花、赤い天井の空に舞う蝶 [図20]、濃紺のゴシック式穹窿の星などにより、教会の内部は抽象的な田園風景と化したのである。

#### 4 結びに代えて——後日談と現在の姿

ガストパール牧師は、1909年に15年の任期を終え、ウンターリーシンゲン教区を離れてプリーニンゲン教区の牧師となり、1921年から引退まで、シュトゥットガルトの教区長となった。ガストパール牧師が引退した頃、ウンターリーシンゲンの教会信徒会は教会内部をベージュに塗り直し、タウトの色彩は部分的にしか残さなかった。また1986年の改装時には、歴史的に根柢のある修復を行うとして、見かけ上残っているタウトの色彩を採用せず、1628年の改築に際してあったとされた想像上の色を採用した。二階では油彩の稚拙な大理石模倣が施され、ベンチは灰色がかったオリーブグリーンに塗られ、タウトが塗った赤茶色の天井板は、ミディアムベージュに、青と赤の縁取り青と赤の枠付きで仕上げられた<sup>39)</sup>。

上述のように17世紀の30年戦争の舞台はドイツ北部に移っていたが、ウンターリーシンゲンはほぼ福音主義派が占めるようになり、村のカトリック教会は説教教会として改修されたのである。しかしながら、同時代の宮殿建築に見られるように、古典主義的な大理石の使用が広まっており、その資金がないところは、塗装によって大理石にみせかけていた。基材から独立した賦彩ではなく、基材を実際と異なるものに見せかける「まがい物」である<sup>40)</sup>。シュパイデルは1986年の改装に関して、タウトの色彩を理解するには「期が熟していなかった」と述べている。

38) Goldschmidt, *Evangelische Kirche*, 4.

39) Speidel, "Die polychrome Farbfassung," 118-19.

40) 賦彩によって別のものに見せかける方法は古くから知られているが、19世紀には貴族の趣味に迎合する作品はキッチュと呼ばれた。20世紀にはキッチュに積極的な意味をもたせる傾向も登場する。しかしタウトはこれを嫌っていたことが知られ、来日後の彼の出版物では「いかもの」や「いかさま」という訳語が当てられた。たとえば、ブルーノ・タウト『ニッポン：ヨーロッパ人の眼で観た』篠田英雄訳（東京：春秋社、2008）をみよ。

本稿では、ブルーノ・タウトが26歳の時に行った最初の色彩建築として知られるウンターリーシングンの福音主義教会について、まずその背景となる時代状況を、16世紀に遡る宗教改革期からの展開に求めた。すなわち、福音主義の隆盛やフランス革命期のカトリック弾圧の反動として19世紀にカトリック解禁の動きが広がる中で、福音主義の側でもその考えに相応しい質実な学校や教会や住宅の建築芸術が論じられた。タウトにこの教会の改装を依頼したのは、このような建築芸術のあり方に共感を覚えた牧師たちであった。

20世紀の変わり目に絵画芸術の分野では、固有色にとらわれることのない実験的な色彩構成の探求がなされていた。こうした探求を行うフォーヴや表現主義の先進性は必ずしも一般に受け入れられるものではなかったが、その根源的意味は建築芸術の領域でも理解が及んでいた。

折しも建設が進んでいたカトリック教会では、伝統に囚われることなく、ピザンツや民俗芸術などを新たに参照し、強烈な色彩空間を生み出す芸術家も現われていた。実際、カトリック教会の装飾は、色彩を通して非日常を演出し、言葉のみならず五感に訴える形象、音楽、香りの力をもって神の世界に近づこうとする場であった。

タウトがシュトゥットガルトに来たのはフィッシャーの下に仕事があったからで、ヨーロッパの若い芸術家や建築家は、かつての石工集団にも似て、仕事を求めて移動したのである。タウトは、イエーナ大学の新築事業とウンターリーシングンの改装に同時に関わっていたが、その取り組みの姿勢はあきらかに異なっている。村の教会では、上流階級の嗜好を真似たキッチンな大理石模様ではなく、村の教会に独特の素朴さと力強さをもたらすような色彩構成を案出した。それは農民独自の価値を認める態度だったと言ってもよく、コッホ牧師やガストパール牧師のような支持者を得ていた。

現在の教会は、タウトの空間構成は——伯爵の棧敷席などに一部変更があるが——維持されている。色彩については逆に、一部を除いて大理石の模様に覆われている。しかしながら、シュパイデルのようにタウトの色彩復活の機運を待ち望む声があるのも確かである。

#### 【図版出典・掲載許諾一覧】

図1, 9, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 19, 20

Courtesy of Professor Emeritus Manfred Speidel, RWTH Aachen University, Germany

アーヘン工科大学のマフレッド・シュパイデル名誉教授のご厚意により、Speidel 1993 (注26) より転載した。図12, 13については、図への日本語記入をお認めいただいた。

図3 Bayerische Staatsbibliothek, Germany

図5, 6 著者撮影 Photographs taken by the author in August, 2016.

図8, 10, 11, 18 著者撮影 Photographs taken by the author in April, 2023.

図2, 4, 7 Public Domain